

## 特集

# 保育現場で「気」になる「トバ考」4

## 「評価」って何だ？

### 幼児期の教育における評価

神長美津子

(大学教員)

はじめに

より良い教育の実現のためには評価は欠かすことができません。評価を通して自らの指導の過程を振り返るとともに、子どもの発達や学びへの理解を深め、それらを次の指導に生かすというプロセスは、教育の水準の維持・向上に不可欠です。しかし、教育における評価の意義を踏まえつつも、いざ評価を具体的に進めていこうとすると、「評価の規準がなくてよいのか」「果たして指導の改善につながるのか」、あるいは「誰のための評価なのか」等々、評価にかかわる悩みや課題は尽きません。

一方に、教育における評価に対する誤解からでしょうか。「一人ひとりの良さや可能性を生かす幼児期の教育には、評価は必要ない」とする意見を聞くこともあります。幼児期の教育にお

神長美津子（かみながみつこ）  
國學院大學教授。専門：幼児教育、保育。  
著書：『幼児教育の世界』（学文社）、『はじめよう幼稚園・  
保育所と小学校との連携』（フレーベル館）。

ける評価の考え方は、教科等の学習が中心となる小学校以降の教育とは大きく異なります。だからこそ、幼児期にふさわしい教育を実現していくための評価のあり方や進め方について、幼児教育関係者はもちろんのこと、保護者も含めて広く理解を得る必要があります。

本稿では、これらのことを踏まえ、幼児期の教育の質を向上させるために必要な評価とそのあり方について考えます。

### 幼児理解から始まる評価

幼児期の教育の質の向上につながる評価は、大きく三つの段階に分けられます。第一は、保育者一人ひとりが行う日々の保育の反省・評価です。第二は、教育課程や保育課程の編成と実施に対する評価・改善です。第三は、地域に開かれ信頼される組織づくりの一環として行われる学校評価です。いずれの評価もより良い教育の実現につながるものであり、三つの段階で評価を適切に行うことが求められます。

特に、「日々の保育の反省・評価」における保育者の基本的な姿勢には、すべての評価に臨む保育者の姿勢に通じるものがあります。一人ひとりの良さや可能性を生かす幼児期の教育では、保育者が子ども一人ひとりの行動やその成長を温かく見守るまなざしを持って接し、幼児理解に基づく評価をすることが、保育のスタートにあります。

子どもは、保育の中でさまざまな姿を見せます。時には「友達の遊びの邪魔をしてばかりで、うまく遊べない」等、マイナスと考える行動もあります。しかし、「その子どもは、なぜそうするのか」という視点から子どもの行動の理解を深めると、一見マイナスと考える行動の中に、発達的な意味を読み取ることができます。つまり、「友達の遊びの邪魔をする」ということは、

「友達への関心が芽生えつつある」ということの表れであり、「邪魔をする」という行動は、その思いがうまく表現できないでいる結果として受けとめられます。こうした発達の理解を踏まえた上で、「保育者のかかわりは適切であったか」「人的・物的な環境の構成は適切であったか」「設定したねらい及び内容は適切であったか」と、自らの指導の過程を振り返ります。

日々の保育の振り返りでは、子どもとの触れ合いを通して、発達の理解を深めていきます。その際、保育終了後に書きつづる保育記録は欠かせません。保育記録に記された一つ一つのエピソードは、断片的であり、そこから得る情報は限られているかもしれませんが、毎日書きつづることにより、断片的な子どもの姿がとなり、その変化に気付くことができます。いずれにしても、子どもの姿に温かな関心を寄せることが、評価の第一歩となるのです。

### 保育者間で子ども観や保育観を交流する

子どもの理解を確かなものとしていくためには、保育者間で子ども観や保育観を交流し、保育者自身が視野を広げ、多様な視点から援助を考えることが必要です。保育者は、自分が担任する子どものすべてを理解しているわけではありません。むしろ、担任からすると気になることが多い子どもですが、立場を変えて隣のクラスの保育者から見ると、その子どもの持っている良さがわかることもあります。保育者同士の協力体制をつくり、多くの目で見たことを重ね合わせながら、評価に臨むことが必要なのです。

特に、「教育課程・保育課程のその評価・改善」では、園長のリーダーシップの下、保育者間で十分に話し合い、子どもの見方や保育の考え方を高めていくことが重要です。そのことにより、独りよがりの見方や考え方を超えることができます。「私の保育」から「私たちの保育」へ、

さらには「わが園の保育」を考えていくことが必要なのです。

幼児期の教育における評価は、保育者一人ひとりの持つ子どもの見方や保育の考え方に基づくわけですから、ある意味では主観的なものなのかもしれません。それが、その主観を磨き、より客観化していく努力が必要です。このため、互いに保育を見合ったり、保育について語り合ったり、時には他の園の保育を参観したりして、研鑽を積んでいくことが必要です。

また、教育課程や保育課程は、一度編成すると、毎年そのまま継承されてしまいがちですが、そうではなく、年度末には短期や長期の指導計画の評価・改善に沿って見直します。より良い教育は、評価・改善を積み重ねることによって実現していくのです。

### 評価を通して、信頼性や妥当性、納得性を得る

平成十九年学校教育法改正により実施されている学校評価では、教職員による自己評価に加えて、学校関係者評価を適切に行うことが求められています。学校関係者評価は、学校に関係がある、またその地域においてそれぞれの分野でリーダーとして活躍している方々に、学校の教職員が行う自己評価について検討してもらおうシステムです。あくまでも教職員による自己評価が基本ですが、その自己評価が独りよがりなものにならないようにすることを目的として実施するものです。

幼児期の教育は、いわゆる「見えない教育」と言われています。したがって、幼稚園における学校評価では、学校関係者評価を通して、いかに信頼性や妥当性、納得性を得るかが課題となっています。そのためにも、「わが園の教育」を広い視野と長い目で見つめ直し、より質の高い教育を目指していきたいものです。